

アミン・バナニ著

『イランの近代化, 1921~1941』

Amin Banani, *The Modernization of Iran, 1921~1941*, Stanford, Stanford University Press, California, 1961, xiv+191 p.

I

この本はイランの近代化に関し、イラン人自身の手によって研究され、英語で公刊された最初のものである。

レザー・シャ期のイランは日本における明治維新、トルコにおけるケマル・アタチュルクの革命期同様、イラン近代史上大変革の時期であった。レザー・シャの強力なイニシアチブによって、急速に西洋化が進められた。イランに対するヨーロッパの影響は16世紀にはじまるが、今日ヨーロッパの影響と認められるものはほとんどがこの時期に導入されたものである。イラン史の研究は中国史、西洋史などと比べた場合、とくに近代化に関してはトルコやエジプトのそれと比べても非常に遅れている。イスラム諸国の近代化を比較史的に考察するに際し、イランに関する研究の貧弱さを補うことが広く要請されているのであるが、本書はまさにこの要請にこたえたものといつてよいであろう。イラン人として自由にペルシャ語史料をあやつれるという利点をもつ著者は、今まで欧米の研究者が使うことのできなかつたペルシャ語の原史料を駆使して、レザー・シャ時代のイランの変革についての研究を進め、また社会学者としての訓練を欧米で受けたという教育的背景のもとに、明確な問題設定をもって、客観的、実証的研究を行なっている。

筆者はイランに対するヨーロッパのインパクトが、従来の伝統的社会にいかなる影響を与えたか、つまり、西洋のインパクトは在来の社会的・文化的構造を完全に破壊したのか、また、近代的なものと伝統的な要素がうまく融和したのかを明らかにしようと努めている。かれの場合、近代化 modernization は西欧化 westernization を意味するが、いかにして、どの程度にイラン社会が西欧化され、西欧化の限界はどこにあるのか、また西欧化によって伝統的社会にいかなるひずみが生じたか、を究明するのが著者の意図するところである。

本書の構成はつぎのようになっている。序章、第1章 歴史的背景、第2章 レザー・シャの勃興、第3章 西洋

化の方向、第4章 軍隊、行政、公衆衛生、第5章 新司法制度、第6章 経済発展と近代化、結論

II

さて、本書は上記のような構成を示しているが、これは大きくわけて、(1)序章、歴史的要約、(2)レザー・シャ期の変革の実態、(3)結論、の3部よりなっている。

まず第1章ではペルシャ帝国とローマとの接触以来のペルシャの西との交渉の歴史を素描し、とくに19世紀以来の列強の対イラン政策とイランとの関係、ナショナリズム、立憲主義の特長ならびにその方向、ヨーロッパのインパクト、政党の出現とロシアの影響などを概観している。西洋のインパクトを許容的ならしめた力として secularization を旗印とするインテリゲンチエアをあげ、レザー・シャの改革はこれらインテリゲンチエアの支持をえてはじめて達成しえたものとしている。また、人類の完全な精神的・道徳的・政治的統一を目標とするパービ・バハイ運動の前進的な社会理念を、同じく西洋化を促進せしめた今一つの力として評価している。

第2章では、1920年代はじめころの社会的・政治的局面、ついでレザー・シャ以前に行なわれた改革の評価、レザー・シャの性格など、レザー・シャ登場前夜の状態を概略する。西洋化の方向と題する第3章では、まずレザー・シャのもたらした変革を「革命」と呼ぶにふさわしいものと評価し、レザー・シャの革命はいまだ十分な評価がされていないが、それは、(1)革命が国民的支持で行なわれ、反抗分子が少なかった、(2)トルコやロシアの劇的な事件にかくれ精彩を欠いた、(3)革命運動には必要不可欠なイデオロギーが欠如していたためとしている。レザー・シャはアタチュルクの改革を範にした。トルコでは完全に過去を打破しえたのに対し、一方、レザー・シャはその栄光ある歴史に近寄り、こうして大衆の支持をえた。このような過去に対する対処の仕方に両者の根本的な差を求めている。またレザー・シャの革命で特長的なのは secularization であるとし、発展への最強の障害として僧職者階層をとらえ、宗教との対応関係を主要な視点としている。

III

第3章から第7章までは、公文書を主とするペルシャ語の原史料を使って、社会、政治、経済、各分野における変革の実態、その結果、影響を分析している。まず、軍隊の新編成から筆をおこす。カジャール朝下では、軍

隊はたとえば南ペルシャ騎兵隊、ペルシャ・コサック旅団などで代表されるように分立、分権化しており、さらに外国の影響下におかれていた。レザー・シャは他の改革に先がけ、まず外国の干渉を受けない統一された軍隊の創設を図った。そして、将校の養成について全国に徴兵制をしいたが、徴兵制は社会に大きな影響を与えずにはおかなかった。その主要なものとして、社会の融合、文盲の減少、農村・部族青年の都市定住化、農村へのヨーロッパ物質文明の流入、などをあげている。また、この他にもっとも重要なものとして、西洋化されたモラルの影響を農村青年が受けたことを指摘している。ついで行政改革については、改革によって官僚の層に変化が生じたこと、つまり中流階級出身者が多く官吏に登用されたことを重要な変化としてとらえている。公衆衛生に関しては、病院の新設などが行なわれたが、これらは宗教家の反発にあい必ずしも進展しなかったとしている。

ついで第4章では、ムスリム・イランの強い影響下におかれていた司法制度がいかんしてヨーロッパ流の司法制度にとってかわったかをみる。裁判はそれまで完全に僧職者の手に握られ、法制はすべてイスラム法によっていたが、フランス、イタリアなどの法制を典拠とした司法改革を行ない、民法、刑法、商法、不動産・登記法などを制定した。このほか、裁判を僧職者の手からとり上げた。これにより僧職者が裁判官より追放され、法制におけるイスラム法の影響を激減することになった。つまり司法制度の改革は anti-clergy の運動となった。レザー・シャがこのような司法改革を積極的に行なったのは、自国に西洋の線に沿った司法制度をもたぬかぎり、カピチュレーション廃止の世論をヨーロッパで喚起しえないと知ったからであるとしている。司法制度はムスリム・イラン的の制度の中で西からのインパクトをもっとも強くうけたものとしているが、これとて完全にイスラム法の影響をぬぐいさることはできず、イスラム法とヨーロッパの世俗法との不すり合いな組合せを残したところにこの改革の限界がみられると指摘している。

第6章では教育改革に言及している。教育は司法制度同様、完全に僧職者の手に握られていた。19世紀のはじめころから外国のミッションスクールの開設、最初の官立学校 darul-funun の設立、国民学校審議会の設置、教育省設置、教育基本法の制定など教育改革のための手法がとられたが、この時期にはさしたる効果もあがらず、改革が軌道にのったのはこれまたレザー・シャの時期であった。レザー・シャの改革はカリキュラムの西洋化、

教員の養成よりはじまった。とくにフランスの教科書を参考にして、カリキュラム、教科書の近代化が図られ、ヨーロッパへ人材を派遣し教員養成を行なった。このほか外国からの諸制度導入に応えるに必要な技術者の訓練をする必要上、各種の技術学校が設置された。テヘラン大学の設立、国による外国留学に対する支持、成人教育、体育教育、などが行なわれた。これらの新制度の導入の結果、教育に対する宗教の影響は著しく弱化した。しかし、一方ではヨーロッパ文化を目的もなく、表面的に模倣したことによってナショナリストが保持しようとした cultural identity はゆがめられることになった、と指摘している。

ついで、終章の経済の発展と近代化では、財政、農業、外国貿易、通信運輸、工業化、天然資源の開発などにみられる変革にふれる。これらの部門にいかなる動機で西洋を手本とする変革がもたらされ、変革がいかなる結果を生んだかをみる。まず、財政改革は改革案を実行するために必要な資金を確保するための要請よりなされた。そのため国有地売却、間接税の増税、関税改正などが行なわれたが、これらの改革の結果、国家財政の中央集権化の確立、政府の財政活動の増大などが達成されたことをあげているが、このほか国有地の売却によって新たな土地貴族の出現をみたことも、その大きな副産物となっている。レザー・シャの近代化政策は、国家の威信を高めるに効果的な点に重点がおかれ、農業はもっとも目の当たられ場所におかれた。品種改良、畜産振興、外人技術者の導入などが行なわれたが、これらは農業生産の一般的水準をあげるためのものではなく、むしろ広大な王有地の生産力をあげるための目的でなされたとしている。外国貿易は国家独占になったが、貿易の国家管理の動機が完全に健全なものであり、それは国の目標達成のための最良の方法であったかを再検討する必要がある、と指摘している。通信運輸機関の改革でもっとも重要なのは鉄道と道路建設であった。この面での発展の結果、都市・町への農村人口の移動、西洋の生活法の浸透、中央政府の影響力の浸透、などがみられた。工業化は機械工業を導入することと、ギルド制度に由来する古い協同的社会の基盤をくつがえすことを目的としていた。工業化は国によって主に推進され、民間企業の進展は弱かった。この理由として著者は資本の不足、長期的政治的安定の欠如、政府の民間企業保護政策の欠如などをあげている。重工業化への心理的誘惑があったにもかかわらず、軽工業に優先権がおかれたが、これは輸入軽減という命題が

必然的にそうさせたものとしている。

IV

最後の結論では、西欧化の性格、その結果についての従来の評価を紹介し、著者自身の見解を披露している。レザー・シャの時代にかくも急速に西洋の技術が導入されたのは、ナショナリズムの精神とレザー・シャの強力なリーダーシップに負うところが大きいとする。また、レザー・シャの改革で特長的な性格として、(1)劣等感と表裏一体をなす外国人嫌い、(2)経済合理性をこえた権威のシンボルとしての工業化への欲求、(3)過去の栄華に対するノスタルジア、(4)西欧社会の皮相的虚飾の無差別な模倣などをあげている。とくに、西洋化の姿を「シャコの歩き方をまねたカラス」にたとえ、その模倣性を強く指摘している。しかし、遅れた国が西洋の文物を導入するのは、内部よりの強い自生的な欲求によるものではなく、多分に外部からのインパクトによるものである。そのため、導入するや否や旧社会に融合しうるものではなく、古い制度との間にひずみをおこすのはどの国の場合にもいえることである。一時的には模倣にみえるかもしれないが、それを「カラス」にたとえるのはあまりにもヨーロッパに視点をおいた見解とはいえないであろうか。

ついで、1930年来の外国人、イラン人のレザー・シャ評価を素描している。まず A. Wilson や J. R. Childs の見解、ヨーロッパ文明の無差別な採用を批判する Kazemzade Iranshahr, Taqizadeh, Ahmad Kasravi などイラン知識人の評価、改革をムスリム・リバイバルと評価する Sardar Ikbar Ali Shah など外国在住のムスリム知識人の見解を概観している。さらに、第2次世界大戦中には改革の底の浅さ、イラン社会の表面的な変形の状態、国家の社会的・政治的・知的問題の複雑さ、などが明白になった。その結果、社会的緊張の原因を西洋化を伝統的な社会機構の中に性急に導入しようとしたことにありとし、改革の尚早性が一般的評価になっているといっている。これらの代表としてトゥーデ党、Lambton や Frye などの所説をあげている。

さらに近代的なものと伝統的な要素との衝突の主要な要因として西欧の政治制度の導入をあげ、Lambton や Muhammad Taqizadeh, Musa Javan などと同じ見解を示している。ついで著者はイラン社会の危機の原因に言及している。従来、外国の干渉に危機の第1の要因を求めるのは一般的であったが、著者はそれは内的なもの、つまり、イラン自体におけるモラルの退化にあると説い

ている。また、モラルの退化も外国の干渉に起因するものではなく、サファヴィー朝下におけるシーア派イスラムの勢力伸張によるとしている。この点、すべての原因をヨーロッパ人の支配のせいにする公式主義の見方をせず、客観的に史実をふまえようとする態度がみられる。最後に著者は西洋のインパクトが効果をみるようになれば、レザー・シャ時代の西洋化の積極的役割が評価されるようになろうとのべている。

著者は近代イランでもっとも重要な時点といえるレザー・シャ治世の20年間をとらえ、レザー・シャ登場前に打破しえなかったものが、いかにしてレザー・シャによって打ち破られたか、またその限界はどこにあるか、イスラムの伝統と近代的なものとの相克などについて、ペルシャ語の第1次史料を駆使して分析しているが、これはイラン近代史研究に一つの光を投げかけたものとしてよいであろう。豊富な新たな史実の紹介のみならず、二元論的視点には教えられるところが多い。しかし、本書ではレザー・シャの指導者としての評価、改革の動機づけなどは必ずしも十分になされているとはいえない。また、西欧化の評価を行なうにあたり視点がヨーロッパにすえられ、イランと同じころに改革にのり出し、同じく強い宗教的背景にありながらも、伝統的なもの、とくに宗教的圧力を打破しえたトルコの興味深い事例が比較考察の対象となっていない。トルコを範としながらもイランでは宗教の影響をぬぐい去ることができなかった。また、トルコでは共和制の道を進みえたのに、イランでは王制をとらざるをえなかった。これら両国の改革にみられる差異は何に起因するのか。トルコを範としながらも、トルコが達成しえたものをイランはなぜ達成しえなかったのか。これは指導者アタチュルクとレザー・シャの性格の差によるものなのか、トルコのイスラムとイランのイスラム、トルコ人とイラン人の国民性、両国の外国との交渉の歴史、などの差によるものなのか。これらはイラン近代史に興味をもつもの等しく関心を示す点である。もし、著者がイランの西欧化の評価をするに際して、トルコとの比較史論的考察を研究の基底にもっていたなら、イランの西欧化の性格づけ、レザー・シャ評価にもトルコとの比較を通じておのずから異なった結論がみられたのではないかと思われる。

著者アミン・パナーニはオレゴン州ポートランドにある Reed College の歴史・人文学科助教授である。

(調査研究部中東調査室 岡崎正孝)